
黒龍皇の血統

現野 イビツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒龍皇の血統

【Nコード】

N4349BA

【作者名】

現野 イビツ

【あらすじ】

魔法という理が存在し、純粹なる人間——純人の他にも、亜人や魔人などが住む世界——“ファンタジア”。世界に一人しかない“龍人”である神刃^{しんじん} クローは、龍族の掟に従って、将来の番候^{つがい}補を守護することになるのだが。……なんで僕には、五人もお嫁さん候補がいるんですかっ！？ 初投稿作品ですので、ストーリーの稚拙さは大目に見てもらえると嬉しいです。また、話が出来次第投稿するので、不定期掲載になると思います。誠に申し訳ございませんが、ご了承下さい。

第零話 “予見”の儀（前書き）

初めまして、現野 イビツと申します。初投稿作品なので、まだまだ未熟ですが、是非楽しんでください！

第零話 “予見”の儀

『……我、今より血族の掟に従い、祈りの詩を紡ぎ出す』

僅かな光と、漆黒の闇が支配する空間に、一つの声が響いた。

『我、世界を統べる黒龍の王と、世界を救いし聖女の間生まれ落ちた子……』

それは、硝子で出来た弦を弾いたかのような、繊細で聞く者全てを魅了する少年の声。

『我が尾、我が角、我が翼。それらが闇色に染まろうと、我が心が永久に純白であることを誓おう』

水晶が覆う洞窟の奥、五頭の龍が囲う祭壇の上で、一つの鏡に向かいながら、少年は朗々と唄い続ける。

『だから、我が血族に代々伝わる秘法——“魔鏡”よ』

少年は、そこで一旦詩を止めて、突如傍らに置いてあった長剣を掴む。

そして、五頭の龍が覗き込むその前で、少年は白魚のようなその指に、長剣の漆黒の刃を滑らせる。

「——っ！」

篝火に映った少年の中性的な顔立ちが、苦痛で一瞬歪む。

しかし、すぐに何事も無かったかのように、その指から流れる鮮血を鏡面に垂らす。

そして——、

『“魔鏡”よ。我こそは、“黒龍皇の血統”神刃しんじん クロー。我が名と、我が血の下に、我が生涯の番つがいを示せ！』

この“予見”の儀の最後の詩を、少年は唄い終える。

次の瞬間、五頭と一人の眼前で、突如“魔鏡”が輝き始めた。

それを見ていた五頭の中で最も巨大な龍——“黒龍皇”ベクリアルが、自らの息子である少年——クローに問う。

『……覚悟は出来ているか、クロー？』

それを聞いたクローは、龍の血族の証である黄金色の瞳を父に向け、苦笑しながら言った。

『正直に言つと、まだ出来てないんだ、父さん』

『……？ 何故だ、クロー？ 確かに、お前は今から一年の間、“予見”に示された将来の嫁を守り続けることになるが……お前には簡単なことだろう？』 黒龍皇は、少しばかり驚いたという風に首を傾げながら、息子にそう尋ねる。

この“予見”の儀とは、成体——つまり十六の齢を迎える龍の血族が、生涯の番となる者を“魔鏡”で占う儀式である。この儀を受けた龍はその後、“魔鏡”に選ばれた者を災厄から守ることになり、見事一年間その者を守りきつたら、正式な番と認められる。

そして黒龍皇は、過大評価を一切せずに、自らの息子にとってこれくらい朝飯前だと確信していた。

しかし、当の本人であるクローは、少し諦めを滲ませた声で言った。

『“お前は何かと、常識の埒外にいる存在だ”ってのは、父さんの口癖だったと思うけど？』

『ムウ、確かにそうだが……』

そう指摘された黒龍皇は、少々狼狽した様子を見せる。

クローの言った通り、彼は純人と龍の間に生まれた世界でただ一人の“龍人”ドラグーン——常識では考えられない存在なのだ。

その特異性を表すかのように、通常十鈔で消える“魔鏡”の光が、一分を越した今も輝き続けている。彼の番の選定が終わらないのだ。『……ハハッ。確かに、我はそのことをすっかり失念していた。しかし、クローよ。我とて、龍族で初めて純人を娶った龍だぞ？ 特異性なら、我とそんな変わるまい』

「そうかな……？」

『そつだ。お前も我の息子なら、雌の一人や二人くらい守ってみせよ』

「いや……、一人や二人ならいいんだけど……」

黒龍皇は、自らの息子を激励する。が、激励された本人はその言葉聞き、嫌な予感を覚えた。それは、消えることなく徐々に大きくなっていく。こういう予感は、よく当たる物だ。黙りこくったクローを、黒龍皇が不審に思ったその時。“魔鏡”を見ていた四頭の龍の内、白亜の鱗と紅蓮の瞳を持つ龍——白龍アパティオンが、二人に声をかけた。

『ベクリアル様、クロー様、選定が終わりました』

『おお、そうか！』

『……しかしながら、少々問題がありました』

「問題？」

『はい』

アパティオンの言葉を聞いた一頭と一人は、一回顔を見合わせた後、同時に“魔鏡”を覗き込み——二人合わせて身体を凍て付かせる。

父と子合わせて四つの金色の瞳が見るのは、全部で五つ（・・・）の候補者の名前。

アパティオンは静かに言った。

『はい。クロー様には、明日より一年間、この五人を守っていただき、その後に五人全員を娶るっていただきたいと思います』

「……………なんで」

アパティオンの言葉を聞いたクローは、呆然と地面に膝を付く。

そして、これから過酷な一年を過ごすことになった少年は――

「なんでこうなるんだああああっ！――！」

――心から、自分の不運を嘆いた。

第零話 “予見”の儀（後書き）

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます！ 感想やアドバイスをあれば、是非教えて下さい！ 次回、“第一話 一年の始まり（仮題）”をお楽しみに

第一話 一年の始まり（前書き）

こんにちは、現野 イビツです。今回は、世界観の設定が殆どになりましたが、是非読んでみて下さい。

第一話 一年の始まり

ここは、魔法という理が存在し、純粹なる人間——純人の他にも、亜人や魔人などが住む世界——“ファンタジア”。ここは、二十年程前までは平和な世界だった。しかし、今の魔人族の長——“魔王”ルシフ・アーテル・グラジオラスが玉座に着いた時から、魔人達が純人や亜人達を襲い始めた。

時が経った今でも魔人達の侵攻は止まらず、世界は“純人と亜人”、“魔人”の二つの勢力に分かれた。

……しかし、そんな時代の中でも、頑なに中立を貫き続ける国がある。

その一つが、“ファンタジア”最大級の国にして、最強の幻獣“龍”が治める国——シュバルツシルト龍皇国だった。

「クロー様。出掛ける支度は出来ておいででしょうか？」

「あ、ちよつと待って！」

部屋の外から響いてきた言葉を聞いた僕——神刃 クローは、鏡台の横に置いてある時計に目を向ける。そこでは、長い針が十二、短い針が八の数字を指していた。

「うわっ、遅刻しちゃう！」

僕は慌てて漆黒の髪を櫛で梳いて、鏡台に置いてあった伊達メガネをかける。そのメガネの奥の、瞳の色は金ではなく黒。

僕は、自分の意思で自らの姿を限りなく純人に近付けられること出来る、非常に常識外れな亜人だ。

パツと見では、純人との見分けが付かず、唯一の特徴である喉の鱗も、鏡台に置いてあった黒のチョーカーで隠す。

その後、シャツとブレザーを急いで着込み、ベッドに置いてあつ

た鞆を掴んで部屋を出る。

「おはようございます、クロー様」

「おはよう、アパ」

部屋を出た瞬間に声をかけられたので、僕はそこにいた父の配下——白龍アパティオンに返事をする。と言っても、昨日洞窟にいた時のような、巨龍の姿で待っていたワケではない。そもそも、巨龍サイズじゃ、純人用に造られたこの家には入れない。

アパは今、給仕服に身を包んだ、白髪赤瞳の美少女の姿になっている。……一応、雄なのに。

「クロー様、学校の方は間に合いそうですか？」

「走れば何とかなりそうだよ」

「それは良かった。高校生活の初日に遅刻だなんて、“黒龍皇の血統”としていけませんからね」

「……血統は関係ないよ。それに、中等部から高等部にあがるだけなんだけどね」

「それでもです」

アパはそう 言いながら、僕のブレザーの衿を正していく。

それが終わったのを見た僕は、急いで靴を履いて外に出ようとする。

「あ！ クロー様、少しお待ちを」

「？ アパ、どうかしたの？」

が、アパに呼び止められた僕は、一瞬足を止めて後ろを向く。

次の瞬間、クローの前でアパが変化し、一つの生物の姿になった。

「……アパ。何、その姿？」

「謎の生物にございます」

僕に胸を張ってそう言うのは、四角く灰色のボディから、尖った白い手、足、尾、頭と羽のような何か（・・・）を生やした、まさに謎の生物だった。

その生物（多分、アパ）は、背面にある羽状の何かを動し宙に浮かぶと、僕の鞆の中に飛び込んできた。

「えーと……アパ？ 何してるの？」

「クロー様の手伝い、でございます」

「手伝い？ ……ああ、そうか」

アパの言葉を聞いた僕は、今日がどんな日か思い出す。

今日は、僕の高校進学の日であると同時に、僕の十六歳の誕生日

——つまり、龍族の掟に従って番候補を守り始める（……）
日である。

僕は、アパに「よろしく願いますよ」と言うと、ドアを大きく
開ける。

「さて、学校に行きますか」

第一話 一年の始まり（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。感想・アドバイス等がありましたら、是非教えて下さい。次回“エクシリオン魔導学園（仮題）”では、遂にクローのお嫁さん候補の一人目が登場予定なので、どうぞ期待を。

以上、現野 イビツでした。

エクシリオン魔導学園（前書き）

こんにちは、現野 イビツです。今回は、予告通りヒロインが一人登場します！

エクシリオン魔導学園

ここは、僕が通うシュバルツシルト龍皇国で最大の学術機関——
エクシリオン魔導学園。

純人と亜人、そして魔人が分け隔てなく学業を行える、中立国ならではの学校である。

何とか遅刻を免れ、無事に入学式に出席することが出来た僕は、その塔のような校舎の第十階層——高等部第一学年の階にいた。

「……………さて」

僕は、校門横に掲示されてたクラス分けに従って、1 - Aの教室の前に来ていたのだが――。

「どうしよう…………？」

僕はそこにある教室の扉を開けもせず、思案顔でそこに立っていた。

「入ったらよろしいでしょうに」

アパが、鞆からひよっこりと顔を覗かせて、僕にそう言ってくる。

……一応、人目は気にしていたみたいだから、突然喋り出したことは見逃してあげてもいい。けど、人が真剣に考え事してる時に、気の抜けるようなことを言わないで欲しい。

それが出来たら、最初から問題がないのだ。

「……ねえ、アパ？　僕が何で悩んでいるか、分かってる？」

「華々しい高校デビューに相応しい、一際目立つ挨拶でも考えておられましたか？」

「違うからねっ！？」

このクラスにいる全員が初対面の人間なら、そうするべきなんだろう。しかし、僕は初等部からの九年の間、この魔導学園に通って

いるので、教室内にいる大半の人間とは顔見知りである。

「じゃあ、知らない人がいるから、悩んでいたワケではないのですね？」

「うん。……と言うか、知り合いがいる（・・）から、悩んでただけだね」

「はい？ それは一体……」

僕の言った言葉の意味が分からなかったのか、アパが聞き返そうとする。が、その時――、

「――誰か外にいるの？」

教室にいた誰かが、扉を開ける気配がした。僕は慌てて、鞆の中にアパを押し込む。そして――、

「あれ、クロー？」

「……え？」

扉を開けた誰かが、僕の名前を呼んだ。

僕は反射的に視線を上げ――硬直してしまふ。そこにいたのは、長い黒髪の一房を、蒼い花の髪留めでサイドテールにした美少女。

その少女は、僕の顔を見て何故か頬を赤らめた後、僕に挨拶をしてきた。

「おはよう、クロー」

「お、おはよう、彩那。^{あやな}その……進学おめでとう」

僕は、少々きこちなく、その少女――彩那・アリア・白鏡^{しろかがみ}に祝辞を贈る。

「あ……」

彩那は、一瞬驚いた顔をする。が、すぐに顔を綻ばすと、僕に言った。

「ありがとう！ クローも、進学おめでとう。また一緒にクラスだね」

彩那の言う通り、僕と彩那は、初等部一年から今年度を含む十年間、ずっと同じクラスに所属している。所謂、幼馴染というやつだ。今の台詞を聞くのも九回目で、例年通りだったら、普通に返事し

てた所である。しかし――、

「え、あ……。そ、そうだね」

今回僕は、先程よりぎこちない返事をしてしまう。

しょうがない、と心の中で呟く。

去年までは、彩那のことを、仲のいい兄妹のようなものだと思っ
ていたが、今日からは（…………）事情が違うのだ。

「…………あ、ナルホド」

僕が狼狽していると、鞆の中からアパの呟く声が聞こえてきた。
バレたら困るので、肘で小突いて静かにさせる。

しかし、それが裏目に出た。その動作を不思議に思った彩那が、
僕に聞いてきた。

「どうかしたの、クロー？」

「え！？ あ、いや…………何でもないよ！ そ、それより、やっぱり
彩那のような純人の黒髪って、綺麗だよね！」

慌てた僕は、咄嗟に思い付いたお世辞で、何とか誤魔化そうとす
る。

“ファンタジア”では、純人以外の黒髪を持つ種族が、意外と少
ないのだ。

しかし、そのお世辞を言った瞬間、彩那は怪訝そうな顔をした。

「『彩那のような純人』って…………クローだって純人じゃない」

「あ」

そうだった。

春休みに“予見”の儀とかをやってたから忘れてたけど、僕はこ
の学校に、自らを純人と偽って入学している。

それは何故か？ 答えは簡単だ。

この国の平和を守るためである。

より正確に言うなら、ここ、シュバルツシルト龍皇国が中立でい
られるのは、この国を治めている“龍”が、純人・亜人・魔人のど
れにも属さない“幻獣”だからである。

なので、もし、このシュバルツシルトの皇子である僕が亜人だと

バレると、亜人側に力を貸す可能性のある危険分子として、魔人たちの侵攻を受けることになるだろう。

だから、僕は自分が“黒龍皇の血統”だと悟られないように、身分を偽っているのである。

が、彩那はそんな僕の考えも知らずに、核心を突いてくる。

「……クロー、私に何か隠してるでしょ？」

「うっ！？」

いくら幼馴染と言っても、僕の身分を簡単に明かすわけにはいかない。

……何が悲しいかって、僕が彩那に悲しい隠してる事が、一つではないことだ。

「い、いやだなー。そんなワケないじゃない」

が、もちろんその事も、彩那に話すつもりはない。と言うか、恥ずかしくてとても口には出来ない、が正しい。

——君は僕のお嫁さん候補だ、なんて。

エクシリオン魔導学園（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございました！

感想やアドバイスを、何でも受け付けてます。まだ一つしかなくて、淋しい限りですが。

それでは、次回“入学式から波乱の予感！？”（仮題）”をお楽しみに。

以上、現野 イビツでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4349ba/>

黒龍皇の血統

2012年1月13日17時51分発行